

越した見識を有していることを示している。この点でも本書は、ウルフスンに比肩しうるような大きなパースペクティブを基礎にもつといてよい。

ただ評者に残る一つのdesideratum は、象徴的相関関係という解釈学的な根本概念を提出した著者がフィロンの *σύμβολον* 概念と彼の解釈学とをさらに徹底的に検討して下さっていたら、ということである。そうすることによって、象徴的相関関係の概念が著者の概念であるのみならず、なによりもフィロン自身の概念であったことがあるいは明らかにされるかもしれないと期待するからである。

---

加藤 武 著『アウグスティヌスの言語論』

創文社，1991年，viii+381+9頁

岡部 由紀子

全体は三部からなり、過去30余年にわたって各誌に発表されてきた研究成果に加筆し表題のもとに編み直した論文集という体裁をとっている。この著作の魅力の一つは、表題に掲げられた主題に対する大別二つの「異なった」アプローチが示されていることにある。即ちこの著作をとりわけ特徴づける第一部「言語哲学的視点から一声と言葉」（以下「声論」と）、第二部「解釈学的視点から一経験と解釈」、第三部「『キリスト教の教え』の言語哲学—『キリスト教の教え』を読む」（以下「解釈論」と）である。この第三部は、著者による邦訳『キリスト教の教え (*De doctrina christiana*)』(以下『教え』；「アウグスティヌス著作集」6，教文館1988本邦初訳)の「解説」に相当している。

また一方、初出一覧によって、ここに採録された論文の成立を大別三つの時期に区分できる。即ち、(A) 第二部第一章「経験」(1編(86)を除いてすべて、65年以前)、(B) 第二部第二章「解釈」(85年以降『教え』の刊行まで)と第三部(『教え』は70年代の初めに着手され88年に刊行)、(C) 第一部(1編(80)を除く5編は全て、翻訳完成後)である。この場合、「声論」とは(C)を、「解釈論」とは(A)(B)を指すことになる。

著者はむしろ最終的に二つを総合する方向を示唆している。読者の関心も最終的にはこの点に向けられよう。それはそのままアウグスティヌスの言葉をめぐる論考を最終的にどのように位置づけるかという問題に関わり、更にはそれが言語をめぐる現代の哲学的な営みにどのような問題提起をなし得るかという関心につながるものだからである。既に全体を通覧する書評が出ている（樋笠勝士、『創文』326,1991）ことでもあり、以下ではこの問題を念頭に、「解釈論」「声論」の順で述べたい。

[1] 著者の「解釈論」はその *Doct.* 研究として発表されていると言えよう。*Doct.* は「聖書」をテキストとして展開されるアウグスティヌスの解釈論である。（*Doct.* は、今日アウグスティヌスの言葉をめぐる思索に取り組みようとする研究者にとって、*Mag.* や *Conf. XI-XIII, Trin.* と、また *Dial.* 等と並ぶ最も重要な基礎文献であろう。『教え』に付された注及び解説は、*Doct.* を「言語論」として読むというここ30年余りの新しい視点を反映していて、先行する諸近代語訳や解説を凌駕していると思われるだけでなく、文献や争点を紹介するとともに自らの見解を披歴する研究書でもある。我々はこの貴重な邦訳を得たことを喜ぶべきであろう。）

ところで、「解釈論」は更に二つの側面を持っている。聖書解釈という営みをどのように位置づけるかについてのアウグスティヌスの思索（「解釈学的思索」）を辿る著者の探求とは別に、アウグスティヌスによる解釈の営みそれ自体（「解釈の経験」）への接近が試みられているからである。著者は「思索の道と聖書というテキスト解釈の道が交叉するところにアウグスティヌスの独自の特色」を見ている（p. 304）。アウグスティヌスが膨大な量の注解を書いていることは、彼の「解釈学的思索」のありようと深く関わるはずであり、研究者たちもこれを等しく認めようが、問題は「交叉」のあり方をどう位置づけるかにあろう。この問題に対して著者は、一方でアウグスティヌスの「解釈学的思索」から比喩の特権性を抽出し、他方、アウグスティヌスの比喩的思惟（これは彼の「比喩についての思索」ではなく、彼の比喩を用いた表現そのものをさしている）の分析を用いつつ、「比喩の形而上学」を語っている。この点を更に検討したい。

著者は、*Solil.*、*Quant. An.*、*Mag.* といった比較的初期に属す著作と比べながら、アウグスティヌス自身の「解釈学的思索」の深まる過程を後づけている。それは、*Solil.* に見られるような「照明の道」から *Doct.* へと収斂する「テキストへの迂回」「釈義の道」への歩みである。その分岐点は388年の *Quant. An.* や389年の *Mag.* の

頃に比定され、*Quant. An.* 末尾の「7階梯の上昇」と *Doct.* 2.7.9-11の比較によって、*scientia* への言及のない前者では方法論として「解釈」はまだ上昇の道に含まれていないこと、「隣人」という「自己完結の環を破る他者との関わり」が視野にないこと (p. 243), また、「*Mag.* では潜在的だった言葉 (小文字の *uerba*) の有用性」が *Doct.* では積極的に述べられ、「人を通して学ぶ」という新しい視点が導入されていること (p. 289), 人と人との間の伝達 (小文字の *docere*) は共に真なるものを仰ぎ見る、「交流」ではなく「共に分かち」という構造をもつこと (p. 263-4), 等の鋭く貴重な指摘がなされる。アウグスティヌスが解釈という「迂路」をとったとする著者の主張に評者は強く共感するものである。

他方、著者によるアウグスティヌスの比喩的思惟の分析から、「自己と世界とを映し出す鏡像の役を果たす……表わす比喩＝表現的比喩」と、やはり388年頃からとされる、「自己の目を形世界よりも高く上げ……*res* を指し示す *referre ad*, 指し示す比喩＝象徴的比喩」との区別が示される (p.207-215)。このそれ自体が階層的な区分に応じるように、「比喩の形而上学」が語られ、「比喩を解くことは……無時間的世界への形而上学的超脱を意味する」(p.216) とされる。これらは、「経験の追体験」の不可能を悟った人が「経験の共有」をめざす営みを、「精神分析医が患者の無意識の言語に接近しようとする状況にも似た……象徴的言語の優位の中で比喩の隠れた意味をとりだすこと」として位置づける、「解釈論」のもう一つの側面を示すものである (p. 136, p. 375)。

この興味深い分析は、しかし、「迂路」の意義をむしろ変質させてしまうのではないか。「比喩の形而上学」は『書簡』55を引用して述べられているが (p. 216-7), *Doct.* 3. 10. 14, 11. 17では、「霊的」という語は必ずしも比喩の解釈にあてられるものでなく、「文字通りに解さるべき章句が比喩として解されてはならない」ことが付け加えられていたのではないか。それはむしろ著者が *regula veritatis*, *regula dilectionis* を高く位置づけていくことに通じると思われる。しかし「直観の場に進み出るための超脱の第一次段階」(p. 215) として「比喩の場の解釈」を捉えることは、たとえ「第一段階に過ぎない」と言われるにしても、むしろミスリーディングではなからうか。

以上に対して、著者が、アウグスティヌスの解釈学的思索の深まりを支えるものとして、彼の「経験」を位置づけ、*Conf.* (ないし *Conf.* に記述されたようなアウグスティヌスの諸経験) との対応を示唆している点は共感できる。(A) の4論文には、む

ろんキケロやマニ教文書も登場するが、これらの「経験」が「解釈学的経験」として論じられるのは、基本的に *Conf.* の記述に基づいてである。また、(A) 以外にも、「経験」と解釈観の深化との対応についての言及は特徴的に見いだされる。例えば、*Conf.* 5. 14. 24 (p.298); 7. 18. 24 (全体に数字の誤植がやや目だつのは惜しい)、20. 26 (p.306); 7. 10. 16 (p. 236) 等である。確かに、アウグスティヌスにとって、実際に彼が行った解釈の経験と解釈論の深化は（著者の言う通り時間的落差はあろうが）相関的であったろう。それ以上に「アウグスティヌスの経験はことばの経験であり、さらに言えば、ホルテンシウス体験、マニ教体験、ミラノの経験、オスティアの経験のどれもが『読む』という行為に始まる、テキストを解読するという解釈学的経験である」という指摘は刺激的である (p. 136-7)。更に、これを裏返してみるなら、*Conf.* の記事はそもそも解釈論的視点から構成されているという、斬新な *Conf.* 観が提起され得るだろう。評者はこの点にも強い関心をひかれている。

[2] 「声論」は著者の試みつつある極めて意欲的で斬新な視点からの提言である。それは、本書の構成順とは逆に、「解釈論」での研究考察を経た著者が、その後、着手した新しい試みを反映するものであり、『言語論』以降に展開されている著者の主張（第40回中世哲学会等）もこのような問題位相で受けとめられるべきであると思われる。従来、「声論」が扱っている領域の諸件は、解釈論の一部に組み込まれるような仕方であつて、従ってその枠組みが本性的にもっている方向性 (*intellegere* の成立を目指す) の影響を受けざるを得ず、また、*sensibilia* に応ずる下位認識をめぐる諸問題として位置づけられざるを得なかったと言えよう。著者の試みは、「声論」をこのような従属的位置から独立させ、それによって、アウグスティヌスの言葉をめぐる議論が新しい緊張のもとで見直される道を開こうとするものである。

そうであれば、各々の議論を成立させている論理は各々の場所で明らかにされねばならず、その限りで両者は峻別されるべき議論である。各々の議論で用いられる言葉（用語）は、必然的に重複するため、読者は文脈の中で問題を読み取る努力が求められるようだが、それはアウグスティヌスのテキストに迫るためには必要な手続きであろう。

問題は、「声」の意義を「言葉」の担う「意味」の意義から独立した仕方までどこまで言えるか、にあらう。著者はアウグスティヌスが声を時間の基本モデルとして捉えていたことに注目し、「声こそ、アウグスティヌスにとって、人間存在の中心的核、存在がおとずれる場所である」と指摘する (p. 6)。この観点は著者のヨハネ論とも言

うべき第一部の第二論文「声」とともに、極めて印象的である。そこでは「声はかの光へと超越するのではない、下降する」(p.58)と位置づけられている。これに対して、時間にこそ位置づけられた声が、「異なる次元に属す時間と永遠を結ぶ掛け橋」であり、「声を聞くとは解釈学的営みである」と言われる(p.6-7)とき、この「声」の意義はむしろ「解釈論」の文脈で語られているように思われる。しかしむしろ「声論」の本領は、「喚ぶ関係の成立」(p.61-4)「二人称成立の場」(p.84-6)をいわば存在論的に開くものとして「声」を位置づけること、また、そうした関係の中に立つこととして「声を聞く」を主張することの方にあるのではないか。それが直ちに「解釈学的営み」に転ずるとしても、両者の位相はむしろ断絶しており、それ故にこそまた、「意味よりも上位に立つ音声 IUBILATIO が歌われる」(p.108)ところに、著者の言う *conditio humana* は最も端的に位置づけられることになろう。それは「迂路」とはまた異なった営みであろう。この断絶による緊張関係の中にアウグスティヌスの解釈論と声論が形成している磁場を見ることが出来るのではないか。そのように読むとき、読者は、「解釈論」「声論」という二極からのアプローチが、アウグスティヌスの言語論研究に拓く豊かな可能性を望見できよう。

だがそもそも、「異なった」と評すこと自体に反論があるかもしれない。本書の構成について、第3部「アプローチ」では、声が解釈の諸領域の一つとされているからである(p.274)。しかしこれは「異なり」に矛盾するものではないと評者は考えている。本書の構成上「声論」が最初に置かれたことの意義は、解釈という営みにとっての存在論的アルケーともいうべき「声」の位置付けにあったと考えられるからである。